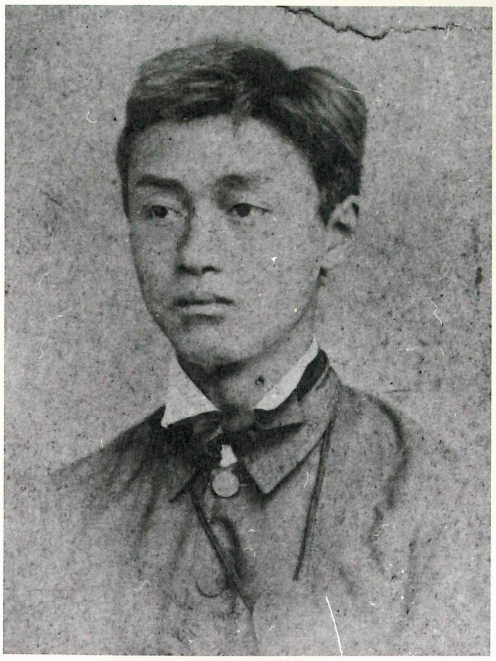
北海道大学 歴史ノート No.22

百三十九年前の新入生の決意
——新渡戸稲造が父親に送った手紙

大学文書館　井上高聡



札幌農学校在学時の新渡戸稲造（1879年、大学文書館蔵）

たらつねに
はようわかれて
遠国へ
行く不幸もただ
皇国のため
国益を
思いば軽ろく
我が命

「たらつね」（たらちね）や「思いば」（思えば）と岩手なまり丸出しで、「皇国のため」や「国益」などと随分力み返っている。百三十九年前の一八七七年、十五歳の新渡戸稲造が、札幌農学校入学のため東京から北海道へ旅立つに当たり、父親へ送った決意表明の歌と句である。さらに、「将来、志を果たした後に傑出した人物となってお目に掛かるつもりですので、ご心配なさらないで下さい。遠い地に赴いても名前を汚すような不始末はいたしません」とも書き送っている。

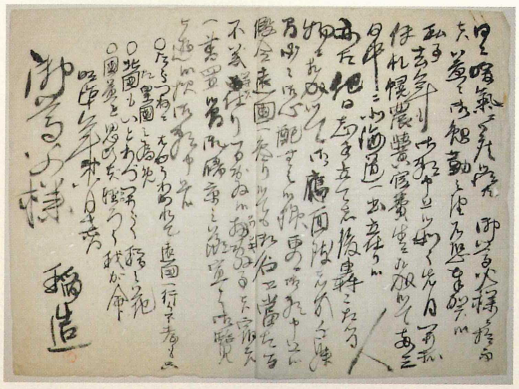
幕末維新期の北海道は、政治的に非常に重要な位置にあった。ロシアなどの外国勢力の影響を押しとどめて、北海道を明確に日本国家の統治下に置くことが差し迫った課題であった。日本政府はそのために、札幌農学校を開校し、北海道「開拓」の指導者を育成して、北海道への農業移住民を増やしていくことを計画した。当時、札幌農学校への入学を志した誰もが、少なからず近代国家日本建設の最前線に立つという気概を持っていたと言える。

また、そのころ、本州以南から北海道へ渡ることは、現在、外国へ渡航する以上の覚悟が必要であった。実際、稲造には札幌へ向かう長旅が待っていた。東京から陸路で品川へ向かい、品川から乗船、途中船酔いが続出する荒海を航行し、三日後に函館に到着した。函館では船乗り継ぎのため三日間足止めを食った後、まる一日かけて小樽へ向かう。小樽からは陸路を馬で半日かけて札幌に辿り着いた。東京を八月二十七日に出、札幌に到着したのは九月二日の夜という、七日間の旅程であった。飛行機移動が普通となり、北海道まで新幹線が延伸した現在ではなかなか想像がつかない。

冒頭の歌・句のほかに、稲造はもう一句、父親に書き送っている。新しいスタートラインに立つときの意気込みとしては、こちらの方が清々しい。

北国も
いとわず開らく
稲の花

百三十九年後の今年、新入生はどんな思いを胸に新しい生活を始めるのだろうか。



新渡戸稲造が父親に宛てた手紙（1877年8月、盛岡市先人記念館蔵）